萬葉集一一二四番歌「小驟」の訓みをめぐって

大浜智代

佐保川尓　小驟千鳥　夜三更而　尓音聞者　宿不難尓

（万葉集　巻七・一一二四）

《校本萬葉集の記述》

（い）　（ろ）　（は）

佐保河爾　小驟千鳥　夜三更而　爾音聞者　宿不難爾

（一）　（二）　（三）　（四）　（五）

本文　（一）河。類、神、温、矢、京、「川」。（二）小。類、神、「少」。（三）鳥。神、コノ下「少」アリ。（四）三。類、「之」。（五）者。細、無、コノ下「諸」アリ。

訓　（い）アソフ。細、漢字ノ左ニ「サハク」アリ。京、漢字ノ左ニ赭「サワク」アリ。（ろ）ソノコヱ。温、「ソノコエ」。（は）イ子ラレナクニ。類、「いのねらなくに」。「の」以下ノ右ニ朱「子ラレナクニ」アリ。

諸説　○アソフチトリノ。代初、書入、「サハク」トモス。略、「アソフチトリ」ト六言ニス。古、「サヲドルチドリ」。補、「アソフチドリノ」ヲ可トス。○サヨフケテ。代初、書入、「ヨフケツ、」カ。考、「ヨクダチテ」。古、「ヨグタチテ」○ソノコヱキケハ。代精、「ナカコヱキケハ」トモス。○宿不難爾。代精、「難」ハ「寝」ノ誤ニテ訓「イ子ラレナクニ」カトス。童、「難」ハ「勝」ニ作ルヲ可トシ訓「イ子ラレカテニ」トス。考、「イ子ガテナクニ」

左は一部注釈書の記述である。

訓釋　佐保川にさをどる千鳥―「川」の字、類、紀、陽、矢、京の他、即ち西、細と版本とには「河」とある。「小驟」を舊訓アソフとあり、細に漢字の左サワク、京も赭でサワクとあり、古義には中山嚴水の説として、「サヲドルと訓べきにや、サヲドルは雉によみて、千鳥には例なけれど、しかよむまじきにもあらず、漢土にては、雀躍などいへることも有をや、字書に、小疾曰驟、とあれば、躍ノ義にも近しといへり」とある。「驟」はサワクと訓む例が（二・一九九、三・三二四、九・一六九〇、一七〇四など）あり、「驟驂舍人者」（三・四七八）の如きもあるので、全釋は「小」の字と熟してもサワグとよむのであろう」とある。定本にはサバシルと訓み、全註釋に「この字は疾速をいひ、馬の疾歩するをいふ字

であるから、今サバシルと讀」とあるが、「さばしる」といふ語は鮎には用ゐられてゐる。（三・四七五、五・八五九）が、千鳥にはどうであらう。「さをどる」の語は「梶野尓　左乎騰流雉　灼然　啼尓之毛將哭」（一九・四一四八）とあり、それも今と同じく作者が眼前に見てゐるのでなく、作者家持がこの句によつて用ゐたのではないかと思はれ、河原に小さい足跡をつけて飛び廻つてゐる千鳥の動作をあらはすに最もふさはしい言葉と思はれるのである。

《澤瀉久孝　『萬葉集注釋』》

◇騒ける―鳴きながら走り廻る。原文「小驟」は少しく走る意で、川原に小さい足跡をつけては飛び廻る千鳥の習性を写した用字。「驟」は集中サワクにあてられる習い。（2・一九九、3・三二四、四七八、9・一六九〇など参照。「杉の野に左乎騰流雉」（19・四一四八）を参考にすればサヲドル（『古義』所引中山嚴水説）の訓もありうる。しかしこの場合でも、少しく走り廻るの意を取っての用字であり、「さ」に「小」をあてたのではない。

《伊藤　博『博萬葉集釋注』》

まず、「小」「驟」に関わる古辞書の記述を挙げる。

佐　子賀メ　タスク

／スケ　禾サ　（観智院本類聚名義抄　佛上二七・2）

小　弘北メ　スクナシ　マレナリ　スコシノ

ヲサナシ　チヒサシ　禾セウ　（同右　法中六八・8）

騎驟　谷正　士救メ　ウクツク　ウツク　ウツク　シハ～

イハユ　シハル　イヨ～　禾シル

（同右　僧中一〇四・6）

当該歌二句目の「小驟」の部分を、本稿がテキストに使った西本願寺本萬葉集（佐竹昭弘他『補訂版　萬葉集本文篇』塙書房二〇〇二年）では「サヲドル」と訓んでいるのに対し、校本萬葉集の記述には「アソフ」とある。

澤瀉久孝氏の『萬葉集注釋』では「サヲドル」と訓んでいるが、その中で先にも挙げたように、「古義には中山嚴水の説として、サヲドルと訓べきにや、サヲドルは雉によみて、千鳥には例なけれど、しかよむまじきにもあらず…」とある。

そこで今回は「小驟」の訓み、またはその部分の表現の「小驟」の訓みについて現在まで様々な諸説があったが、調査した結果そのどれもふさわしくないように筆者には思われる。

以下に当該「小驟」の訓みかとされてきた例を一部挙げ、それらの訓みがふさわしくなさそうに思える根拠を挙げる。

サヲドルと訓まれている例（当該歌以外に一例のみ）

①梶野尓　左乎騰流雉　灼然　啼尓之毛將哭　己母利豆麻可母

（巻一九・四一四八）

アソフと訓まれている例

②鴨鳥之　遊此池尓　木葉落而　浮心　吾不念國

（巻四・七一一）

③烏梅能波奈　佐岐多流曽能ゝ　阿遠夜疑遠　加豆良尓志都ゝ

阿素毗久良佐奈（巻五・八二五）
④波流佐良婆　阿波武等母比之　烏梅能波奈　家布能阿素毗尓
阿比美都流可母（巻五・八三五）
⑤宇梅能波奈　乎理加射之都〻　毛呂比登能　阿蘇夫遠美礼婆
弥夜古之叙毛布（巻五・八四三）
⑥春裏之　樂終者　梅花　手折乎伎都迫〻　遊尓可レ有
（巻一九・四一七四）
⑦…百礒城之　大宮人乃　退出而　遊船尓波　梶棹毛　無而不樂毛
…（巻三・二五七）
⑧比等期等尓　乎理加射之都〻　阿蘇倍等母　伊夜米豆良之岐
烏梅能波奈加母（巻五・八二八）
⑨烏梅能波奈　多乎利加射志弖　阿蘇倍等母　阿岐太良奴比波
家布尓志阿利家利（巻五・八三六）

サワクと訓まれている例

⑩…風吹者　白浪左和伎　潮干者　玉藻苅管　神代従…
（巻六・九一七）
⑪…海片就而　玉拾　濱邊乎近見　朝羽振　浪之聲蹤　夕薩丹
櫂合之聲所レ聆…（巻六・一〇六二）
⑫葦多頭乃　颯入江乃　白菅乃　知為等　乞痛鴨
（巻十一・二七六八）
⑬…於伎敝許藝　邊尓己伎見礼婆　奈藝左尓波　安遅牟良佐和伎
之麻未尓波　許奴礼波奈左吉…　（巻十七・三九九一）
⑭…木暗茂　松風丹　池浪颱　邊津遍者　阿遅村動　奥遍者
鴨妻喚…（巻三・二六〇）
⑮鴈我祢波　都可比尓許牟等　左和久良武　秋風左無美
曽乃可波能倍尓（巻十七・三九五三）
⑯…美奈刀尓波　之良奈美多可弥　都麻欲夫等　須騰理波佐和久
安之可流等　安麻乃乎夫祢波　伊里延許具…（巻十七・四〇〇六）
⑰三吉野乃　象山際乃　木末尓波　幾許毛散和口　鳥之聲可聞
（巻六・九二四）
⑱…旦雲二　多頭羽乱　夕霧丹　河津者騾　毎レ見　哭耳所レ泣
古思者（巻三・三二四）
⑲高嶋之　阿渡川波者　騾鞘　吾者家思　宿加奈之弥
（巻九・一六九〇）
⑳於伎敝欲理　之保美知久良之　可良能宇良尓　安佐里須流多豆
奈伎弓佐和伎奴（巻十五・三六四二）
㉑…和可伎兒等毛波　乎知許知尓　佐和吉奈久良牟　多麻保己能…
（巻十七・三九六二）

シバナクと訓まれている例

㉒御苑布能　竹林尓　鶯波　之波奈吉尓之乎　雪波布利都〻
（巻十巻九・四二八六）
㉓…河瀬乃　浄乎見者　上邊者　千鳥數鳴　下邊者　河津都麻喚
百礒城乃…（巻六・九二〇）
㉔…夜麻備尓波　佐久良婆奈知利　可保等利能　麻奈久之婆奈久
春野尓…（巻十七・三九七三）
㉕…御笠乃山尓　朝不レ離　雲居多奈引　容鳥能　間無數鳴
雲居奈須…（巻三・三七二）

チドリナク等と訓まれている例

㉖由布義理尓　知杼里乃奈吉志　佐保治乎婆　安良之也之弖牟
美流与之乎奈美（巻二十・四四七七）
㉗河渚尓母　雪波布礼之〻　宮裏　智杼利鳴良之　為牟等己呂奈美
（巻十九・四二八八）
㉘夜具多知尓　寝覚而居者　河瀬尋　情毛之努尓　鳴知等理賀毛
（巻十九・四一四六）
㉙狭夜中尓　友換千鳥　物念跡　和備居時二　鳴乍本名
（巻四・六一八）
㉚千鳥鳴　佐保乃河門之　清瀬乎　馬打和多思　何時将レ通
（巻四・七一五）
㉛…芳野河之　河瀬乃　浄乎見者　上邊者　千鳥數鳴　下邊者
河津都麻喚…（巻六・九二〇）
㉜…決巻毛　綾尓恐　言巻毛　湯　敷有　跡　豫　兼而知者
千鳥鳴　其佐保川丹　石二生…（巻六・九四八）
㉝…暁之　寝覚尓聞者　海石之　塩干乃共　汐渚尓波　千鳥妻喚
葭部尓波　鶴鳴動…（巻六・一〇六二）
㉞佐保河之　清河原尓　鳴知鳥　河津跡二　忘金都毛
（巻七・一一二三）
㉟佐保川尓　小驟千鳥　夜三更而　尓音聞者　宿不難尓
（巻七・一一二四）
㊱佐保河尓　鳴成智鳥　何師鴨　川原乎思努比　益河上
（巻七・一二五一）
㊲飫海乃　河原之乳鳥　汝鳴者　吾佐保河乃　所レ念國
（巻三・三七一）

「サヲドル」と訓まれているものは二例しかなく、一字一音で雉が「サヲドル」と訓まれている。そしてもう一例は当該歌の「千鳥」であった。

驟

驟…回也庶也
數也奔車駈而驟是也
（天治本新撰字鏡　巻五・一ウ）

新撰字鏡には、回也、のように鳥の所作に当てはまりそうな義注訓が見られるが、後半に「奔車駈」とあり、車の動きを詠んでいるようであり、当該歌の表現としてぴったりこない。

「アソフ」と訓まれている例は全部で（②～⑨など）三十例あったが、そのどれもが人間が花をかざして遊んだり、まかり出でて遊んだりしているのを詠んだ歌ばかりで、鳥が遊んでいるとされるものは②に挙げたわずか一例しかない。

後半に挙げるチドリの生態を見ると、動きは「両足を交互に動かして歩いたり走ったりする。実によく動きよく走る。」とある。この動きを数羽でしていたら追いかけっこをして遊んでいるように見ることも可能である。しかし、このような千鳥の様子は激しく、落ち着きのない様子であるが、萬葉集中の他の「アソブ」とされている歌を見てみると、どれも静かに遊んでおり、騒がしく動き回って遊ぶというものではないと思う。また、鳥が遊んでいるという表現があまりにも少ないので、この「アソブ」という表現もまた当該箇所の訓みには適していないと考える。

現在言う千鳥の生態は次のようなものである。

十七センチ。すずめとムクドリの中間くらいの大きさの白っぽい鳥。

両足を交互に動かして地上を歩く。早く足を動かし、まるで地上すれすれに浮いてすべるように見える。立ち止まるたびにピクリと頭を上下させる。切れ味のある鋭い羽ばたきで直飛。単独、または小グループですごす。

鳴声は、ピッとかピウー。上空を旋回しつつ、ピッピッピッ…と連呼する。

（『検索入門　野鳥の図鑑　陸の鳥②』）

ちどり【千鳥】

『万葉集』では「…朝猟に　五百つ鳥立て　夕猟に　千鳥　踏み立て…」（巻十七・家持）のように「多くの鳥」という意味で用いられる場合もあったが、「ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く」（巻六・赤人）のほか、「千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば」（巻四・大伴郎女）「…落ちたぎつ　吉野の河の　河の瀬の　清きを見れば　上辺には　千鳥しば鳴く　下辺には　かはづ妻呼ぶ…」（巻六・金村）のように佐保川や吉野川など、主として川について、自然の景観を示す一例として川千鳥がよまれている。それに対して、平安時代後期以降になると『百人一首』にも採られている「淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝ざめぬ須磨の関守」（金葉集・冬・兼昌）をはじめ「霜さえて小夜も長居の浦寒み明やらずとや千鳥鳴くらむ」（千載集・冬・静賢）「風吹けばよそになるみの片思ひ思はぬ浪に鳴く千鳥かな」（新古今集・冬・秀能）などのように海岸の千鳥が中心となり、季節は冬に限られてきて、いわば「冷え冷え」とした雰囲気を描出する役割を果たしているのである。「はまちどり（浜千鳥）」という歌語が一般的になるゆえんである。（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』二七六～二七七頁）

⑩～㉑に挙げた「サワク」ものは主に、白浪、すどり、かはづなどで、それらはすべて音のするもので、連想しただけでも騒がしい様子が思い浮かぶ。当該歌の歌の意はうるさくて寝られない、迷惑なものとして千鳥を表現したいので「サワク」はその意味では適当なのではないかと考えた。しかし、千鳥の鳴く様子が「ナク」や「妻呼ぶ」とも表現されており、それ以外の表現が見られないのでなお問題は残る。

②～㊲において「チドリ」と訓まれている例を見てみると、ほとんどの例が「ナク」と詠まれており、他は、㉙に「友換千鳥」㉝に「千鳥妻喚」と表現されていた。その中で当該歌のみ「小驟」と表記され、その訓みが「ナク」でないとするのには違和感を感じる。

以上の考察から現時点で「小驟」の訓みとして最も可能性のありそうな「サワク」と「シバナク」の二つの表現に絞って考察を進める。

まず、「サワク」と「シバナク」と訓まれていた鳥の生態に違いがないか調査する。

「サワク」と訓まれていた鳥は次のようである

ナベヅル

九十二～九十六センチ。首が長く黒っぽい小型のツル類。つがいと幼鳥からなる家族群で行動し、昼間は一定の縄張りを持ってその中で採餌などをするのが本来の習性らしい。夜間は水の張られた数枚の水田に集まってすごす。

鳴声は、秋から春先にかけて、渡来地ではよく鳴声が聞かれる。タンチョウに似た声だが、やや声量が少ないクルルーとかコロローと鳴き、ディスプレーの時にはコーワッカ、コーワッカとにぎやかに鳴き交わす。

（『山峡カラー名鑑　日本の野鳥』）

たづ【鶴】

鶴のこと。多く歌語として用いる。『万葉集』にも「相見鶴鴨（あいみつるかも）」（巻一）「夢所見鶴（いめにみえつる）」（巻二）のように完了の助動詞「つ」の連体形「つる」を「鶴」という漢字を借りて表記しているので、当時「鶴」という語がなかったわけではないことが知られるが、鳥の「鶴」の場合は、「鶴」といわずに、たとえば「難波潟潮干（しおひ）に立ちて見渡せば淡路の嶋に多豆（たづ）渡る見ゆ」（巻七）「和歌の浦に潮満ちくれば潟を無み葦辺をさして多頭鳴き渡る」（巻六・赤人）のように、すべて「たづ」という語を用いているのである。（中略）

有名な赤人の「葦辺をさしてたづ鳴き渡る」という歌がまさしくそうであったが、『万葉集』における「鶴」は鳴いて空を飛ぶものであった。しかるに平安時代における「鶴」は「松」や「亀」ともによまれ、慶賀のシンボルになりおおせた。中国の仙人は松の実を食し鶴に乗って飛行したというが、これはまさしく中国の影響以外の何者でもない。『万葉集』ではよまれていなかった「菊」が中国文化の影響を強く受けた時代の『古今集』に多くよまれているのと同様に、また『万葉集』には「月」を見て悲しむことはまったくなかったのに『古今集』に色濃く現れ、その結果「たづ」だけではなく「つる」も和歌の世界に数多く登場するようになってきたのである。（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』二七七～二七八頁）

マガモ

八十五～九十九センチ。オスでは緑色の頭と黄色いくちばしが目立つ淡水カモ類。越冬地では、湖、沼、大きな川、内湾の海上など開けた水面に群れていることが多く、時には数百羽の群れをなす。鳴声、カモ類の中では最も良く鳴く鳥である。オスはグワーックワックワッと尻下がりの大声で鳴く。メスもクワックワックワッという低い声である。水面から飛び立つときはグエーグエーと鳴くことが多い。（『山峡カラー名鑑　日本の野鳥』）

マガン

七十二センチ。「竿になり、鉤になり」の隊列を組んで飛ぶ太った水鳥。カモ類と違ってつがいの結びつきが強く、一方が死ぬまでつがい関係が維持される。越冬地でも、つがいと幼鳥からなる家族群を単位として行動し、それが集まって大群をつくる。

鳴声はクワハハン、クワハハンという少し甲高い声で飛翔中に良く鳴くが、上空を編隊で飛ぶときは時々鳴くだけで、飛び立つときが

一番盛んである。また、ねぐらにする沼ではほとんど一晩中鳴声が聞こえる。

（『山峡カラー名鑑　日本の野鳥』）

かり【雁】

「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の数さへ見うる秋の夜の月」（古今集・秋上・読人不知）「霞立ちて雁ぞ鳴くなる片岡のあしたの原は紅葉しぬらむ」（同・秋下・読人不知）のように秋になると北国から来て、春になると「春来（く）れば雁帰（かり）るなり白雲の道ゆきぶりにことやつてまし」（古今集・春上・読人不知）「春霞立つを見捨ててゆく雁は花鳴き里に住みやならへる」（同・詠人不知）のように北へ帰ってゆくのである。

なお、「かりがね」は本来「雁が音」であり、「今朝（けさ）の朝明雁（あさけかり）が音（ね）聞きつ春日山もみちにけらし吾が心痛し」（万葉集・巻八）のようによまれていたのであるが、のちには「うきことを思ふつらねてかりがねの鳴きこそ渡れ秋の夜な夜な」（古今集・秋上・躬恒）のように雁の異名になってしまうのである。

「シバナク」と訓まれていた鳥は次のようである。

ウグイス

十七～二十一センチ。ホーホケキョと鳴き、春を告げるやぶの小鳥。低地から山地までいろいろな植生の所に広く分布する。鳴声。繁殖期にはヒィーホケキョ、ホーホケキョなど、なきはじめに高低のある声でさえずる。また谷渡りと呼ばれるケキョケキョケキョケキョと長く続く声も出す。（『検索入門　野鳥の図鑑　陸の鳥②』）

うぐひす【鶯】

『万葉集』以来数多くよまれた。「春されば まづ鳴く鳥のうぐひすの…」（巻十）というように春の最初に鳴く鳥としてとらえられ、「柳の梢（うれ）に鶯鳴くも」（巻十）「鶯の来鳴く山吹」（巻十七）「萩の古枝に春待つとをりし鶯」（巻八）「竹の林に鶯はしば鳴きにしを」（巻十九）「鶯のかよふ垣根の卯の花の」（巻十）などさまざまな所で鳴いていたが、「鶯の木伝ひ散らす梅の花」（巻十）「鶯の木伝（こづた）ふ梅のうつろへば」（巻十）など、梅の花に鳴く鶯が最も多い。春の最初に鳴く鶯が春の最初に咲く梅の花とともによまれるのは当然であったといえる。平安時代に入ると、例外は幾つかあるけれども、ほとんどすべては「梅の花」とともによまれ、配列から見て桜かと思われるものについても、たとえば「鶯の鳴く野辺ごとに来てみればうつろふ花ぞ風ぞ吹きける」（古今集・春下・詠人不知）「花の散ることやわびしき春霞たつたの山の鶯の声」（同・後蔭）のように「春」という語を使わず「花」という語を使っている。「梅」以外の具体的な花の名が「鶯」にはふさわしくなかったのである。

このように「鶯」は春を待つ歌から春を惜しむ歌まで春を通してよまれるものであるが、「我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心花と散りなば」（古今集・恋五・詠人不知）のように「憂く」を掛ける場合もまれにはあったのである。（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』六九～七〇頁）

カホトリ（ヒバリ）（架空の鳥だがひばりではないかといわれている）十七センチ。広い草原に住み、高い空で朗らかな声でさえずる鳥。畑、牧場、草原、川原、埋立地などに見られるが、丈の低い草がまばらに生えて露出した地面の多い場所を好む。オスは春先から草原の上空で停空飛翔しながら、長時間さえずって縄張りを宣言する。鳴声。繁殖期にはピィピィピィ、リリリ、ピリリリ、リィリィ、ピリピリなどという。細かな声でせわしなく鳴き続ける。主に飛翔中にさえずるが、杭や石の上に止まってもさえずる。

（『山峡カラー名鑑　日本の野鳥』）

きぎす【雉子】

雉のこと。『万葉集』に「春の野にあさる雉（きぎし）の妻恋ひにおのがありかを人にしれつつ」（巻八・家持）とある歌、現代の諸本諸注いずれも「キギシ」とよんでいるようであるが、この歌をそのまま採った『拾遺集』では「春の野にあさるきぎすの妻恋日に斧がありかを人に知れつつ」（春上・家持）と「きぎす」になっている。平安時代には「きぎす」の方が一般的であったことが知られるのである。ほかにも、「狩に来ば行きても見まし片岡のあしたの原にきぎす鳴くなり」（後拾遺集・春上・長能）など多くよまれている。いっぽう「きじ」の方も「春の野のしげき草葉の妻恋ひに飛びたつきじのほろろとぞ鳴く」（古今集・誹諧歌・定文）とよまれていて、一方が雅語で一方が俗語というような関係でないことが知られる。いずれにしても春の鳥であり、わが身を隠せないですぐ飛び立って、所在をしられてしまう鳥としてとらえられていたことがわかる。（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』一二七頁）

以上、「サワク」と「シバナク」鳥の生態を見てみると、両者には明確な違いが見られた。

「サワク」鳥はどれも七〇～一〇〇センチの大型の鳥で、「シバナク」鳥は二十センチ前後の小鳥で鳴声を見てみると、さえずるように鳴き、どんなに大きな声で鳴いても「サワク」という表現にはあてはまりそうになくて、「細かな声でせわしく鳴き続ける」や「谷渡りと呼ばれるケキョケキョと長く鳴く声」などはまさに「シバナク」という表現に当てはまるのではないか。

そこで当該歌の千鳥はどうであろう。十七センチと小鳥で、ピッピッピッと連呼する。このように生態的に見ると千鳥は「サワク」に完全にあてはまらなくて、「シバナク」のほうが適している。

萬葉集中の「シバナク」には「數鳴」という万葉仮名が当てられ、「小驟」を「シバナク」と訓むには「動」字を調べる必要がありと考え調査した。「動」は左の古辞書の記述にも見られるように、「サワガシ」という意味を含んでいる。

当該の「驟」は「サワク」と訓めるのでこのことで「驟」と「動」が関連する。仮に「動」を「ナク」と訓めれば、また、「小」を「シバ」と訓む事を証明できれば「小驟」は「シバナク」と訓む事ができる。

■古辞書の記述

動徒董メ　オウコク　ヤ、モスレハ　ユク　ツクル　クツロク
サハカ（ヘ）シ　ユ爪ル　フルハフ　ウタフ　ホトニ　トヽロカス
ヒヽカス　ソヽノカス　ホト～　禾土（レ）ウ

（観智院本類聚名義抄 僧上八三・5～6）

ナク

吠

…　クフ　クラフ　サヘツル

カム　ナク鳥　五巧メ　（同右 佛中三四・1）

鳴

亡明　／ナル　／ナク　イナヽク　ホユ

イカソ　ナラス　イハユ　（同右 佛中六一・2）

嗤

…嘖叫呼也

左（へ）豆留又奈久（天治本新撰字鏡 巻二・一三・オ・5）

嚇

ナク　鳴同　（黒川本色葉字類抄・中・三三オ6）

「ナク」と訓めるものの中に「サヘツル」があったので、次は「サヘツル」の記述を挙げてみよう。

サヘツル

嘈

／サヘツル　タノシ　オモロシ

／サワク　（観智院本類聚名義抄 佛中・六二・7）

囀

知戀反…

鮨也　左へ豆留　（天治本新撰字鏡 巻二・一七・ウ）

囀

サヱツル

鳥吟也　喨譯咬哢歌　己上同

（前田本色葉字類抄・下・五〇・オ・五）

「サヘツル」の訓みとともに、「サワク」や「カマヒスシ」など騒がしいという意味の訓みが見られた。このことは「動」が「サハカシ」と訓めるので共通しているのだとみなす。

このように考えて、もう少し「サワク」について調べる。

サワク

謿

…　ミタリ　カマヒスシ　サワク

カツテ　イソク　（観智院本類聚名義抄　法上六五・3）

噪

先到メ　※鳥群鳴也

サハカシ　（同右 佛中四七・1）

轟

呼萠メ―…　群車声

ト、メク　サハカシ　ト、ロク　（同右 僧中・八四・4）

磬

五労反　鶏口也

左和久　又　止～ロ久　（天治本新撰字鏡 巻二・一六ウ）

嘈嘈

衆聲也皷聲　止～

呂久　又

左和久　（同右 巻一二・二四オ）

ナク―サヘツル―サワク―動

以上のことから、「ナク」は「サヘツル」と訓め、「サヘツル」の中には「サワク」や「カマヒスシ」と訓めるものがあり、これにより「動」字の訓みの中の「サハカシ」との間がつながる。

そして注目すべき点は、観智院本類聚名義抄の中の「サワク」の記述の「鳥群鳴也」（※印は筆者が付けた）である。このことから、「騾」と「動」がつながり、「騾」は「ナク」と読むことができる。次に、「小」を「シバ」と訓めるか確認のため古辞書の記述を挙げる。

數…

アマタ…　シハ〜　シルシ　マホル　アマタ、ヒ
禾シユ　又ソク（観智院本類聚名義抄　僧中　五五7〜8）

少

書治メ　又去　スクナシ　禾カシ　シハラク　スコシ
ヤウヤク　カク　スコシキ　ナシ　マレナリ　ヲサナシ
イトキナシ　オホロケ　オロカナリ
（同右　僧下七五・3）

小

…　スクナシ　マレナリ　スコシキ
ヲサナシ　チヒサシ　禾セウ
（同右　法中六八・8）

頻

一賓　シキリナリ　シハ〜　スミヤカナニリ　イヤ〜
ヒソム　重也　比也　近也　毎也…　（同右　佛下本二三・3）

「小騾」の訓については、従来説では、「サヲドル」「サワク」などと訓じられている。しかし、その「サヲドル」説にしても、集中では、「千鳥がサヲドル」という形で詠まれた歌はなく、また、「サワク」説でも、「千鳥がサワク」という形で詠まれた歌は見られない。

そのように、従来説では集中において似たような場面・情景で詠まれた歌が見られないのに対して、仮に小論で述べたように「シバナク」と訓んだとすると、「千鳥がシバナク」という形で詠まれた歌は集中でも数首（前出）見られ、それらの点からみても、この「シバナク」という訓は十分注目すべきに値すべき訓みではないかと思う。

古辞書類に見たように当該歌「小騾　千鳥」部分において「シバナク」の訓に対応すべき箇所に存する「騾」字が「シバシバ」あるいは「ナク」と訓めることのできる字であることは、一層、この「小騾」部分を「シバナク」と訓む可能性を強くしているのではないかと思う。

その点を次に見る。

侚　且紫反上小貝
須古志支奈留　（天治本新撰字鏡　巻一・三三オ）

少時　同
又　シハシハカリ　（前田本色葉字類抄・下・八六ウ）

鈴木一男氏の『初期点本論攷』には、左のようにある。

「衆僧の為に法を説ケ。我今背痛し、小ク自ラ停（イタト）（マ）り息（シマラ）（まむ）」（第十八章　聖語蔵願経四分律　巻四十六　破僧揵度古点三〇二頁・6）

また、金光明最勝王経音義　承暦三年鈔本には

数〜　佐久反又足音　（四ウ）
之婆〜〜

前出のように、「数」は「シバシバ」と訓める。色葉字類抄の「少」の字は「シハシ」と訓める。観智院本類聚名義抄の記述によると、「少」

と「小」は「スクナシ」「スコシ」という意で共通している。

以上のことを勘案すると、サワクは萬葉集中では騒がしい、白浪やすどり、かはづに使われており、当該歌の意もうるさくて寝られない、迷惑なものとして千鳥を表現したいのであればある意味ぴったりと思ったが、萬葉集中の「夜も寝られない」としている歌の意は、恋の歌がほとんどだった。当該歌も最初は騒がしくて夜も寝られないと解釈すると思っていたが、「妻を呼びしきりに鳴いている千鳥の声を聞くと、私も妻のことを想って夜も寝られない。」と解釈する方が適しているので「サワク」と表現するのは不適当と考えたい。

また、萬葉集の「サワク」「シバナク」鳥の違いを見ても、体格の違いがはっきり見られたので千鳥は「サワク」鳥ではない。また、千鳥の生態を見ると、千鳥はしきりに鳴いている様子がうかがえる。金光明最勝王経音義の記述「数〜」は「シバシバ」で「しきりに」という意味であるし、観智院本類聚名義抄の「頻」に「シキナリ」「シハ〜」という記述も見られるので、千鳥は「シバナク」と訓むのではないだろうか。

また、当該歌は「小驟」で「小」はシバと訓めることが証明できたが、「驟」は一字で「ナク」とも訓めることが辞書の記述で判っている。このことは一層、この「小驟」部分を「シバナク」と訓む可能性が強いと考えさせられるのではないかと思う。

萬葉集で「小」が使われているものを見てみる。

㊳小豆奈九（あずきなく）　何狂言（なにのたはこと）　今更（いまさらに）　小童言為流（わらはごとする）　老人二四手（おいひとにして）

（巻一一・二五八二）

㊴小竹之葉者（ささのはは）　三山毛清尓（みやまもさやに）　乱友（さやげども）　吾者妹思（われはいもおもふ）　別来礼婆（わかれきぬれば）

（巻二・一三三）

㊵不欲見野乃（いなみのの）　浅茅押靡（あさぢおしなべ）　左宿夜之（さぬるよの）　気長在者（けながしあれば）　家之小篠生（いへしのはゆ）

（巻六・九四〇）

㊶小竹葉尓（ささのはに）　薄太礼零覆（はだれふりおほひ）　消名羽鴨（けなばかも）　将忘云者（わすれむといへば）　益所念（ましておもほゆ）

（巻十・二三三七）

「小豆」や「小葉」などのように「小」という字をあてているが、「小」の字は直接訓まれていない。意訓されている。当該歌も「驟」が「シバ」「ナク」両方訓めることから、「小」は意訓されている可能性もある。

この「小驟」については、「シバナク」と訓む時、「小（シバ）」「驟（ナク）」と逐次的に訓むのか、「小驟」全体で意訳的に訓むのかなど、漢字表記と訓との対応がどのようになるのかという問題は残されているが、少なくともこの部分を「シバナク」と訓むという点については、ほぼ間違いないものだと思う。

従来説においては「小」字は、訓には直接的には関わらず、ほとんど意味がなく、ただ添えられているだけであるというような解釈がなされることが多いようであるが、もし「小驟（シバナク）」と訓むことができ、この「小」字を、「シマシ・シマラク」という訓などから「シバ」を引き出すものとして加えられたものであると捉えることができるならば、この「小」字は、明確な意味があって加えられたことになる。

従来説のように訓んだ場合、この「小」字を訓にうまく生かすことができないため、この「小」字がなぜここに加えられたのかという点について明確な理由を指摘することが困難なのではないかと思

うが、小論のように「シバナク」と訓んで、この「小」字を「シバ」に対応するものと見ることができるならば、この「小」字についても「シバ」と訓むために必要であったから加えられたという、至極当然の帰結を得ることができる。

表記に表われている以上、やはり、無意味なものとして処理する前にまずは、その表記がなされた意図を読み取れるような訓みかたをした方がよいのではないだろうか。

このように考えて筆者は当該箇所は「シバナク」と訓もうと思う。

以上のことから当該歌を改訓すると

佐保川尓（さほかわに）　小驟千鳥（しばなちどり）　夜三更而（よくたちて）　尓音聞者（ながこゑきけば）　宿不難尓（いねかてなくに）

となる。

参考文献

・片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』（笠間書院　一九九九年第一版　二〇〇一年　第三版

・正宗敦夫『観智院本類聚名義抄』（風間書房　一九五四年）

・京都帝国大学文学部国語学研究室編　『天治本新撰字鏡』全国書房刊一九六七年

・中田祝夫　林義雄編　『字鏡抄　天治本』（勉誠社　一九八年）

・『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社　一九七六年）

・『角川国語大辞典』　（角川書店　一九八七年）

・築島裕　『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会　一九六五年）

・山口佳紀　『古代日本語文法の成立』（有精社　一九八五年）

・佐竹昭広・木下正俊・小島憲之　『補訂版　萬葉集本文篇』（塙書房　二〇〇二年）

・高野伸二編　『山峡カラー名鑑　日本の野鳥』（山と渓谷社一九八五年）

・中村登流　『検索入門　野鳥の図鑑　陸の鳥②』（保育社一九八六年）

・佐佐木信綱　『校本萬葉集』（岩波書店　一九七九年）

・『萬葉集大成』（平凡社　一九五三年）

・澤瀉久孝　『萬葉集注釋』（中央公論社　一九六五年）

・伊藤　博　『萬葉集釋注』（集英社　一九九五年）

・鈴木一男　『初期点本論攷』（桜風社　一九七九年）

・大坪併治　『平安時代における訓点語の文法』（一九八一年）

校本萬葉集諸本の略称

細…細井本　類…類聚古義　神…神田本　温…温故堂本

矢…大矢本　京…京都帝国大学本　無…活字無訓本

略…萬葉集略解　代精…萬葉集代匠記精撰本　童…萬葉集童蒙抄

代初…萬葉集代匠記初稿本　補…萬葉集略解補正　考…萬葉考

（おおはま・　）